

売薬の意匠あれこれ 珫瑯(ほうろう)看板—その2

一般社団法人 北多摩薬剤師会会長 平井 有 (ひらい・たもつ)

前回は、近代(とくに昭和時代)の看板広告の歴史には欠かすことのできない珫瑯(看板)を紹介しました。

珫瑯看板とは明治21~22年(1888~89)頃に誕生し明治・大正時代から昭和の中頃の1950年代から70年代にかけて屋外の広告媒体として普及したものです。

珫瑯看板は、本来は金属板にガラス質の釉(うわぐすり)を高熱で焼き付けたもので光沢があり耐久性のあるものですが、類似

の金属製の印刷仕上げの看板も珫瑯看板に含まれます。現在でも良好な状態を保ったものもありますが、時代と共にプラスチック製などの看板に取って代われ昭和50年(1975)頃から徐々に見かけなくなったものです。

前号ではインパクトが強く古代から邪気を払い魔除けとなる赤色(紅色・朱色)の珫瑯看板を紹介しましたが、今回は有名売薬(OTC医薬品)の珫瑯看板をご覧ください。



①



②



③



④

①「六神丸」

「六神丸」は牛黄(ごおう)・真珠粉・麝香(じゃこう)・蟾酥(せんそ)などを配合した本来は中国の雷氏方の「六神丸」がその原点ですが、その後多くの類似処方生まれ、現在では強心作用を薬効の主体としている薬剤の「救心」や「牛黄丸」へと発展、小児五疳(ごかん)薬の「宇津救命丸」や「樋谷奇応丸」もその流れと思われる。

一時期、配置売薬を中心に100社にも及ぶ多くの『〇〇六神丸』が作られました。この看板の「六神丸」も明治9年(1876)に設立された富山の配置売薬の廣貴堂の「六神丸」の珫瑯看板で「心臓に…」と謳っています。

②「エビオス」

「エビオス」は昭和5年(1930)に当時の大日本麦酒により製品化されたビール酵母から生まれた伝統保健薬で、当初「エビオス」は医家向けにビタミン剤、食欲増進剤として使用され、一般向けとしては「食欲促進栄養素 健康長寿治病の鍵の薬」とし、特定の疾病を目的にした薬品ではなく、病気予防・保健栄養をも目的とする大衆保健薬として販売されました。

昭和7年(1932)には日本薬局方に「薬用酵母」として収載されるに至りました。

この「エビオス」の名は研究所のあった恵比須とエビスビールの「エビ」、そしてラテン語で生命の基の意味である「ピオス」を組み合わせたものです。

③「メンソレータム」

「メンソレータム」は日清戦争のあった明治27年(1894)に米国で開発された軟膏で、メンソール(Menthol)とワセリン(ペトロレータム: Petrolatum)を合成した造語です。日本には明治38年(1905)にアメリカから来日した宣教師ウィリアム・メレル・ヴォーリズによって伝えられました。

その後大正9年(1920)には、近江セールズ(のちの近江兄弟社)を設立し、「メンソレータム」の輸入販売、のちに国産化を開始しました。

残念なことに近江兄弟社はのちに業績が悪化し倒産してしまいましたが、「メンソレータム」は昭和50年にロート目薬やパンシロンで有名なロート製薬がアメリカのメンソレータム社より専用使用権を取得し「メンソレータム」を製造・販売しています。一方、近江兄弟社は社員による再建努力の結果、同剤の販売再開にこぎつけその名称を「メンターム」と改めて発売し現在に至っています。

④「ロート胃腸薬 シロン」

「シロン」は③で登場した現在「メンソレータム」を製造・販売しているロート製薬の胃腸薬で、その歴史は明治32年(1899)誕生の「胃活」→「ロート胃腸薬」(昭和24年(1949))→「ロート胃腸薬 シロン」(昭和29年(1954))→「パンシロン」(昭和37年(1962))へと受け継がれてきたものです。